

# 概要報告

実施期日	7月29日(月)【午後】
部会名	小学校 総則部会

テーマ 『自信をもって学び合う子どもたちの姿を目指して～校内研究の取り組みを通して～』

## 提案概要

全体的に素直で優しく、穏やかな性格の児童が多い。一方で、主体的な行動や意欲という面において課題が見られる。また、他の児童の意見に耳を傾け、自分の意見を述べることができる児童も少ない。

こうした実態を受け、個の学習と集団での学びを通して、基礎学力の定着を図るとともに、意欲的に学び合い、高め合うことのできる児童を育てていきたいと願い、研究テーマを設定した。

## 【実践の概要】

研究テーマの具現に迫るために次のような流れで取り組んだ。

② 研究1年目…児童の実態の把握、サブテーマの確立

②研究2年目…話す・聞く力のスキルアップに向けて「トークタイム」等の活用

「考えることを楽しむ・考えを深める」授業の創造に向けて指導案の統一

よりテーマに迫るための校内研究の充実に向けて「6つの構成要素による授業デザイン」の活用

③研究3年目…実践の継続及び研究発表

## 【成果と課題】

- ・自分の考えだけではなく友達の考えに耳を傾けながら、自分の考えを構築していくとする児童の姿が見られた。
- ・小グループで考えを伝える・聞くことができる子が増え、活動を楽しんでいる児童の姿も見られるようになってきた。
- ・「6つの構成要素による授業デザイン」の活用を通して、密に教材研究・授業検討を重ねる教員が増えた。
- ・授業後に発問等をポイントにして振り返る教員が増えた。
- ・「考えを深める」ことについて、まだまだ難しいと感じている教員が多く、今後の研究の具体が見えてこない。

## 質疑応答

### 【質疑応答】

Q：トークタイムはすべてのクラスで取り組んだのか。詳細について教えてほしい。

A：低学年は週1回、中学年は週1回、高学年は月に1回、それぞれ取り組んだ。トークのテーマもそれぞれの学年部で決めた。ディベートを行う学年もあった。時数に関しては、国語（モジュール）としてカウントした。

Q：研究のスタートがとても大切だと思う。配付資料にアンケートがあったが、アンケートの項目について教えてほしい。

A：研究1年目のアンケートは項目数が多かった。手探りで取り組んでいたので多くなったのかもしれない。全国学力・学習状況調査の学校質問紙に出てくるような項目も入れた。記述欄は設けなかった。2・3年目のアンケートについては、配付資料に掲載のとおりである。

Q：配付資料の6ページに思考ツールとあるが、どのようなものを使用していたのか教えてほしい。

A：児童の考え方や思いを深めるために使用した。ツールに関しては、教員が探して児童に提示し、児童が活用できるよう指導した。「くらげチャート」、「ピラミッド型のチャート」等があった。

Q：6つの構成要素による授業デザインはどのように活用するのか、詳細について教えてほしい。

A：まず学習者の実態から書き込む。その後の書き込む順番は特に決めていない。研究テーマが具現した姿等を書い

てもらった。配布資料では構成要素を線で結んでいるが、これは教員が指導案検討をしながらメモをしたもので、研究推進部からの指示ではない。

Q：話合い活動について、小規模校ならではの悩みはあったか。

A：話す子は話す、話さない子は話さないという暗黙の雰囲気を児童も感じている様子であった。トークタイムにより、低学年から育てていくと高学年で変わってくるのではないかと思っている。暗黙の雰囲気を打破できるよう努めた。

【グループ協議】「教員が共通理解して取り組んでいる『授業改善』への取組」について協議し、いくつかのグループに発表してもらった。

- ・共通理解して取り組むのは、現状としてなかなか難しい。実態に合わせて取り組むが、なかなか教員の足並みが揃わない。
- ・校内研究で講師を招聘しているが、講師によって言うことが異なり、混乱しているという学校の事例もあった。共通理解の難しさを痛感している。また、小学校は、来年度の全面実施に向け、「外国語」や「プログラミング教育」を研究・研修している学校が増えている。
- ・教員にも主体性があり、一致団結はなかなか難しい。いろいろな意見が出るのが正常であって、無理に共通理解を求めなくてもよいのではないか。
- ・研究テーマ等に関しては共通理解が必要である。テーマに向かうプロセスが様々あってよいのだと思う。提案のあった6つの構成要素による授業デザインは、教員みんなでやろうといった時に使えるツールだと思った。
- ・「『話合い活動』を取り入れながら授業に取り組む」ということは共通のテーマになった。方法は様々あると思う。一つの方法の中では理解が深まっていくが、マニュアルがあると形骸化するという側面もある。その都度、教員同士も話し合いながら授業づくりに取り組んでいくことが大切ではないか。

### まとめ概要

- ・提案者の学校は小規模校であったようだが、小規模校だからこそを強みにしてほしい。
- ・大切なのは強みであり、「うちの学校の子どもたちの強み」を捉えてほしい。子どもの実態の捉え方として、全国学力・学習状況調査の結果を有効に活用してほしい。中には、経年変化を追う設問もある。実態を捉える際の恰好の材料となるであろう。
- ・提案のあった「6つの構成要素による授業デザイン」は、多面的に取り組むことができて良いと思った。いろいろなものを出し合う中で、「ここは押さえよう」というポイントを見出し、授業に取り組んでほしい。
- ・授業改善の大切なことは「続けていくこと」である。共通理解を得ることをゴールに設定するのではなく、子どもたちの変容、成長をゴールに設定し続けていけば、自ずと共通理解も図れるのではないか。

# 概要報告

実施期日	7月29日(月)【午後】
部会名	小学校 国語部会

## テーマ

## 『伝え合う力を高める授業～伝え合う力のもとになる「主語と述語」～』

### 提案概要

#### 提案設定の理由

これまで文学的文章を学習する際、人物の行動や物の様子を表す言葉に着目して読むことの指導に力を入れてきました。その学習を通し、「誰が」「どうした」や「何が」「どんなだ」等を意識して文章を読むことができる児童が増えた一方、日常の会話では、「先生、○○さんが～」のように主語や述語が欠けているという現状もある。

新学習指導要領では、「論理的に思考する」ことが求められている。本単元において、人物の行動や物の様子を捉える際に役立つ、主語と述語という概念を学習することは、「伝え合う力」や「論理的に考える力」の基礎の学習になると考え、テーマを「伝え合う力を高める授業」とした。

#### 学習指導要領との関わり

##### 第2章 第1節 第2〔第1学年及び第2学年〕 2 内容

- ・B 書くこと (1) ウ 語と語や文と文との続き方に注意しながら、つながりのある文や文章を書くこと。  
・〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕
  - (1) 「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。 イ 言葉の特徴やきまりに関する事項
    - (カ) 文の中における主語と述語との関係に注意すること。

#### 実践内容

今回の授業では、主語と述語の関係への理解を深めるために、児童言語研究会が作成した教具「文ちゃん人形」を使用すること、言語事項の指導においてもグループ活動を取り入れることを学びの手立てとし、児童のよりよい理解に努めることとした。

単元目標は、文の中に主語と述語があることに気付き、その関係について理解すること、主語と述語を適切に用いて簡単な文を作成すること、語と語の続き方に注意しながら、つながりのある文を書くことの三点である。授業は全2時間扱いとし、1時間目は、「文ちゃん人形」を黒板に掲示のうえ、頭や体の部分を隠しながら教師が発問し、「主語」と「述語」の概念について児童の理解を促した。2時間目は1時間目の学習活動に加え、カードを用いたグループ学習活動を設定した。児童自身がカードの頭と体の部分に言葉を書き入れ、「主語」と「述語」の関係が成り立つ文を作成する。発表はグループで行い、頭と体のどちらかの部分のカードを隠して発表者が発言すると、聞き手の児童が「主語は?」「述語は?」と発表者に聞くという、双方向のやりとりがある対話的な学びとなるよう発表の場を設定し、学習の定着を図った。

#### 成果と課題

文の「主語」と「述語」を人形の「あたま」と「からだ」として理解し、視覚的に認識させたことは効果があった。今後の学習において修飾語が増え、文が複雑化した場合でも「主部」「述部」として文を構造化して考える力につながる。また、より親しみやすい絵である「文ちゃん人形」を用い、グループ発表活動を取り入れたことにより、大変意欲的に、楽しく活動する児童の姿が多く見られた。グループでの発表過程において繰り返し「主語は?」「述語は?」と声に出す活動を設定したことも主語と述語の概念を理解する効果的な手立てとなつた。

一方、二点の課題も挙げられる。一点目は、五つある文の成分のうち、「主語」と「述語」の二文節しか取り扱わなかつた点である。多くの児童が、「何を」「どのように」特に修飾語に当たる文節をもっと自由に書きたがっており、「主語」と「述語」の二文節に制限することによって窮屈な様子を見せていました。二点目は、今回の「主語と述語」のような文法の学習については年間における授業時間を多くは取れず、児童が授業時に理解はできてもその後の活用がなければ忘れてしまう恐れがある点である。年間指導計画において継続的な指導が可能となる単元

のつながりを考え、言葉の特徴や決まりに関する事項の文法学習が、生きてはたらくものとなるよう工夫していく必要がある。

## 研究協議概要

- 「単元計画の工夫について」と「文法的な学習について」の二点を協議の柱とし、8グループで協議を行った。
- ・人形などの学年でも効果的に使える教材である。主語と述語に学習を焦点化したことについて、今回の単元学習においては適切である。しかし、発展学習として、もっと児童が迷うような問題を取り入れても面白い。学習時間の確保については、壁に掲示したり、宿題として出したりするなどはどうか。
  - ・主語と述語に絞ることについては、児童や学級の実態に応じて自由度をもって考えればよい。今回は低学年として学習すべき最低限の「主語と述語」を押さえればよい。高学年でも主・述のねじれが生じるなど課題はある。生きてはたらく学習とするには、例えば朝顔の観察文、なりきり作文を書くなど生活につなげた言語活動が考えられる。
  - ・教科書の単元計画としては、本来であれば10月あたりの「お手紙」の学習前に位置付けられているので、そこで授業ができれば効果的だったが、研究発表の日程等もあり今回は致し方なかった。児童の作文において、例えば「文ちゃん人形」の帽子の部分を修飾語にするなどして、自由に作文させてもよかったですという意見があった。また、主語と述語を意識し、日記などの作文を継続的に行うという提案もあった。
  - ・主語と述語の正しい使い方については高学年でも課題である。日々の生活でも意識させながら定着を図りたい。修飾語等を使用した作文については、基本となる主語と述語をきちんと押さえたうえで自由度を上げていくといい。年間指導計画にあるように、「ようすをあらわすことば」を事前に学習しているためできるのではないか。
  - ・他教科においても、自分の感情を伝える際にも、正しい文法事項を習得しておくことは大事なことであり、児童にその必然性を感じさせられれば理解や習得につながりやすい。作文時はもちろん、日常生活でも意識させたい。また、人形を日常的に継続して掲示しておくと視覚的にも効果がある。
  - ・主語・述語については基礎を身に付けるために低学年でしっかりと押さえ、そのうえで3年時に修飾語の学習をすればよい。また、グループ学習を設定するにあたっては、学習への取り組み方や発表方法について理解できない児童もいる。具体物を使った支援やワークシートでの工夫が必要となってくる。
  - ・人形を使用することで、例えば顔の部分を隠して主語が分からなくなるなどイメージしやすくなり、主語と述語への理解を得やすく、今後の応用も効く学習であった。修飾語の使用については、この段階で自由に作文させると、本来、学習の定着を図りたい主語と述語についてがぶれてしまう。自由に作文した児童については全体発表の場では取り上げず、個別指導として言葉かけするに留まる程度でよいのではないか。
  - ・自由度を上げて修飾語も使用するなどさせたいが、個人差がある中で難しい部分もある。最後にクイズをさせるなどして発展的に学習できるとよいかもしれない。今回の学習は、ラインやツイッターなど単語だけで会話が成り立つ世代に、伝え合う力の基本を身に付けるための大変な学習と思われる。文法の学習については授業時間が限られてしまうが、このような学習を伝え合う力の基に、例えば、書くことの指導として日記、話す・聞くことの指導として帰りの会でスピーチするなど、伝える習慣を多く設け、必然的に伝え合う力を高める場を持ちたい。

## まとめ概要

素晴らしい提案発表を元にグループ協議が十分盛り上がった。主語と述語は、子どもが初めて出会う言葉を整える学習である。子どもたちは幼いころの限定的な関係性から、言葉で伝えることを繰り返しながら人間関係を広げていく。改めて、国語という教科は、言語能力の育成を重視する教科であるという認識を持つことができた。

新学習指導要領の解説「2国語科の改訂の趣旨及び要点」には、「全国学力・学習状況調査等の結果によると、小学校では、文における主語を捉えることや文の構成を理解したり表現の工夫を捉えたりすること」に課題があることが明らかになっている（6ページ）。手紙などを書く経験が減少し、主・述のねじれも当たり前にある。文法の学習に取りかかりにくい今の子どもたちに、「文ちゃん人形」での学習のしきかけは効果的であり、インクルーシブ教育の視点からも子どもたちの学びをより助けるものとなった。我々教員は、常にアンテナを張り、このようなしきかけのある有意義な授業を日常的に設定し、いかに指導できるかが大切である。

## 概要報告

実施期日	7月29日(月)【午後】
部会名	小学校 社会科部会

### テーマ

『つなげよう、未来をつくろう～社会科における、自ら問い合わせ、研究し続ける学びの創造～』

### 提案概要

単元 第4学年「安全、安心、みんなのくらし」

#### ○実践に向けての課題意識

- ・「調べてまとめ、発表する社会科」から「子どもが考える社会科」への脱却を図りたいと考え、今回の実践に取り組んだ。

#### ○「警察」を教材とすることの難しさ

- ・「安全、安心、みんなのくらし」単元のうちの「安全なまちを目指して」で、警察の仕事を教材として取り上げることから始めて、事故防止や防犯のための地域の人々の工夫や努力を考えさせるものである。
- ・児童にとって警察と自分たちの生活のつながりは実感のないものなのではないか。
- ・児童に、警察の仕事を自分ごととして捉えさせて考えさせることは、非常に困難なことである。
- ・自分たちの生活の安心・安全を守るために警察が行っている工夫や努力を考えさせ、自分たちの生活と警察とが深くつながっていることを実感させたい。

#### ○単元の流れ

- ・事前に身近な大人に「生活していて不安に思うこと」についてインタビューをした。しかし、ここで「警察」の文字はほとんどなく切実感はなかった。
- ・児童に知っている警察の仕事を出させた。知っていることは主に交通に関するものである。知っていること以外に疑問もあがり、警察の仕事に興味がわいてきたかなという手応えがあった。
- ・学区にある駐在所から、警察官の人に学校に来てももらった。警察官の方の話で「警察の仕事は、みんなの命と財産を守ること」という言葉があり、「悪い人をつかまえること」が仕事だと思っていた児童にとっては新しい気付きだった。
- ・「警察を見るとヤバい」という児童の発言があった。学校における「先生が来たらヤバい」という感覚と結びつき、警察という存在が子どもたちにとっての自分ごとに大きく近づいた。
- ・「安心・安全なまちづくり」について考えたことをまとめた。警察ができることには限界があり、それぞれの立場からできることがあり、協力しているという話になった。「警察はなくてもよいか」という教師の問い合わせに真剣に考え、思考に葛藤が見られた。学習課題が各々の子どもの「問題」になったと感じた。

#### ○成果と課題

- ・学習課題を立てることは容易ではない。単元の最初に子どもが知りたいといったことが真の学習課題となりうるのか疑問。
- ・児童にとって自分ごととさせるための学習素材の提示について。選択、提示のタイミング、出合せ方など、より吟味していく必要がある。
- ・「子どもが考える社会科」は社会科本来の目的である、「人間形成」や「公民的資質の育成」につながるものである。

## 質疑応答

- ・子どもの問い合わせから授業を展開していき、単元計画通りにいかないのも良いと思う。
- ・「警察を見るとヤバい」というのは、子ども目線であるのか。大人の目線でなく、子どもの目線に立って授業を作つていけたら良い。
- ・警察官の話を通してどこをゴールと設定したかったのか  
→未然防止というところに行けばよかった。警察の本来の目標は事故をなくすことだが、なくすことができないもどかしさの中でどうしていくのかということを考えていければ。子どもたちの思考がそうなれば良い。抽象的ではあるが、子どもの言葉で警察本来の仕事に迫つていきたかった。
- ・学習課題を設定したのが全15時間計画のうちの10時間目だった。その後の課題を解決するところへはどのようにもつていったのか。  
→主に児童の振り返りから見取り、次時へとつなげていった。教師からのまとめで終わらず、オープンエンドにした。ノートの振り返りや発言を聞く中で、警察に対するイメージが変わってきたことを実感できた。警察の仕事というものが生活に身近な自分ごととして捉えることができていると感じた。
- ・積み重ねが大事であり、子どもの問い合わせから学習を作ることは容易ではない。調べて、まとめる経験を積んだ上で、初めてできることなのではないか。各学年で系統的に取り組むことが大事である。
- ・警察の仕事を追つていく途中に、警察官の話で「警察は私たちの命と財産を守っている」という結論が出てしまっている。身近な例を調べていき、最終的に「警察は私たちの命と財産を守っている」というところにもつていっても良いのではないか。やはり「考える社会科」は難しい。
- ・児童から出た「ヤバい」という発言はジレンマや多角的に考えることになるのだろうか。「ヤバい」という言葉が抑止力を指しているのであれば、未然防止につながったのではないか。
- ・評価について  
→市販のテストと併用して、児童の思考を見取つて評価した。
- ・もう一度同じ単元の授業をするならどうするか  
→「人に聞くと分かる」という経験を積ませることが大事である。新学習指導要領では3年生での扱いになるので、発達段階に合わせる必要がある。

## まとめ概要

本単元においては、「考える社会科」を目指して、子どもが真に追及したくなるような学習課題をどのように立てていくのかということも含めた提案であった。新学習指導要領でも問題解決型の学習が引き続き重要なものであるとされている。今回の実践で目指した「考える社会科」への転換は非常に大切な視点であった。目の前の子どもたちの実態に応じて答えは何通りもあるので、子どもが真に追及したくなるような学習課題をどのように設定するのかということは難しい。今年度は3年生と4年生が並行して学習している単元である。3年生の実態として、安全を守る警察の仕事についてどのように認識しているのかを把握し、出合せ方も考えねばならない。手立てとして、子どもの実態を把握するアンケート、子ども110番や交番のマップなどを用いるなど、子どもが調べたり見たりしたものの中に学習課題を設定するヒントが隠れているかもしれない。さらに、見方・考え方を働かせた問い合わせを意識していく必要がある。子どもの学びのプロセスを意識していくことが今後求められていく。無意識にやつてることを可視化して、教師の頭の中で意識していくことが大事である。

# 概要報告

実施期日	7月29日(月)【午後】
部会名	算数部会

**テーマ** 「単位量当たりの大きさの考え方との差異からとらえる割合の学習  
～数直線の活用を通して～」

## 提案概要

- ・5年生「単位量あたりの大きさ」と「割合」と一緒にやつたらどうか。平成29年度版学習指導要領では、領域が変わった。どちらの単元も「C変化と関係」の領域になった。
- ・全国学力・学習状況調査では、式を立てて答えられるが、その答えの意味がわかっていないという現状がある。百分率の正答率も50%程度だった。この難教材をどう教えたらいいかを考えた。
- ・本単元の指導の際には、数直線が大事ではないか。子どもが分かる手立てになる。どちらの単元も比例関係をもとにして考える。→数直線を使うと理解しやすい。

## <本時>

- ・導入で陣取りゲーム（椅子取りゲーム）男子（20人）対 女子（16人）で行った。負けたら椅子を1つとられる。
- ・混み具合を調べるために、数直線に表してみよう。  
→数直線にできない。割合の単位が分からない。
- ・児童は既習内容の「もとの数をそろえる」というところまでは、考えることができた。
- ・児童から割合の考えが出たときに、「これが割合なんだよ」と用語やその意味を教えてあげればよかったです。

## <まとめの問題>

- ・カップラーメンのビッグ（100g : 205円）とノーマル（80g : □円）どちらがお得？
- ・「円/gの数直線」は、1あたりを求めてから、いくつ分をかけるので2回計算する手間がかかる。
- ・「割合の数直線」は、計算が1回で済むから、良い。
- ・%という単位がつけば、数直線にかけるようになった。
- ・100% = 1がとらえやすい。数直線には、1があったほうが数量関係が分かりやすい。

## 質疑応答

- ・本校は4月に「単位量当たりの大きさ」と3学期に「割合」を学習する。学校全体のカリキュラムマネジメントも大事だと思うが、これからどうしたらよいか。  
→連続して学習すると、逆に混乱する子もいると思う。実際に学習したら、児童が疲れてしまうのではないかとも思う。間に図形があってもいいかな。学年の先生とも相談したが、実際に入れかえるのは厳しいと思うが、可能性は感じる。

## <グループ協議>

- 協議の柱
- 2つの単元を連続して学習するメリット、デメリット
  - 数直線の活用の有効性について

### ① グループ

メリット：既習内容を思い起こせる。数直線の活用をしておけば、今後の学習につながる。

デメリット：苦手な子が辛い。息抜きになる単元があつてもいいかな。

## ② グループ

メリット：関連性を持って学習できる。

デメリット：児童は、何を1とするかを理解するのが難しい。 $\%$ と $g$ の違いをきちんとおさえておかないと、混乱すると思う。数直線の活用については、教え方によるが、有効性は高い。

## ③ グループ

メリット：単元につながりがあるので、児童の思考の流れを切らずに学習に入ることができる。

デメリット：算数が苦手な子を作ってしまうかもしれないという心配がある。児童の実態にもよる。

数直線は、文章題には有効。数直線が書けても、式化できない子もいる。そういう児童にどういう手立てをとるかも課題である。

## ④ グループ

メリット：比例をおさえておけば、わかりやすいのではないか。

デメリット：単元と単元の間に計算もあった方がいいのではないか。違うツールについても話していた。教科書には、かけわり図というツールも載っている。

## ⑤ グループ

メリット：上記同様。

デメリット：前単元が難しい時には、次の単元を指導している最中に前単元の補充学習ができる。難教材を連続させてしまうと、それができなくなってしまう。4年生まで数直線を指導する際に、5年生の「割合」を意識する必要がある。

## ⑥ グループ

メリット：児童の記憶の定着に良い。

デメリット：領域が一緒だから、あえて別にしたらいいのかなと思う。数直線の活用は良い。低学年からの積み上げは必要。学校でどのような手立てを活用して、児童の理解につなげるのかを統一できると良い。

## ⑦ グループ

メリット：学習したことを活用できるような活動（椅子取りゲーム等）があるといい。

デメリット：「速さ」も5年生におりてくる。きちんと単元配列を考えないと、児童を混乱させてしまう。数直線の意味を教える必要がある。視覚的で良い。教科書会社にもよるので、教師の見通しや計画性が大事。子どもに、どんなツールを使ったら問題解決できるのかも考えさせたい。

### まとめ概要

- ・メリットもあるが、デメリットも目立つ。子どもの実態に合わせながら、計画をする。教師の力が問われる。
- ・数直線はよく吟味して使うと良い。
- ・かけわり図とは、6マスの図。いろいろなツールを上手に活用していくようにしたい。

### <助言指導>

- ・中学校の教員からすると、領域に連続性がないのが、違和感。小と中の違いであり、児童の発達段階にもよるのかもしれない。単元の配列は、教科書会社によって全然違う。単元の時期があまりにも離れていたら、少しだけ間を縮めるというアイディアもある。
- ・お金の計算だと子どもは食いつく。課題は重要。
- ・今日のような話し合いをすることに意味がある。子どもの実態に合わせて、児童ファーストで教材研究をしていってほしい。

# 概要報告

実施期日	7月29日(月)【午後】
部会名	小学校 理科部会

## テーマ

## 『豊かな自然体験をもとに、科学的な見方や考え方を育てる ～？のタネから、やってみよう！～』

### 提案概要

#### 第3学年「植物を育てよう」

- ・児童は、素直で明るいが、受動的である。友達の意見を自分の中に取り入れる事が苦手な子も多く、また、自分の考えを伝えることが苦手だと感じている子も多い。お互いに子ども達同士が意見を伝え合う喜びをあまり感じていないという実態から、「一人ひとりが課題意識をもち、主体的に活動に取り組む姿」と「自分の考えをもち、伝え合い深め合う姿」を願う姿とした。
- ・新学習指導要領では、3年生で初めて導入される理科では、生活科の学習と関連を考慮し、体験的な活動を多く取り入れ、問題解決の過程の中で問題を追究していく姿勢を育てることが挙げられているため、1・2年生の時は、何を学習してきたのかを調べ、3年生の学習へつなげた。
- ・3年生では、教科書に則って行い、後半は発展単元として「身の回りの実」という活動を取り入れた。
- ・その後、総合的な学習の時間で「植物を使おう」と「たねを食べよう」という学習に取り組んだ。「植物を使おう」では、枯れたヒマワリの茎の纖維を使って紙漉き体験を行った。出来上がった紙に毛筆で文字を書き、作品展に出した。「たねを食べよう」では“大豆100粒運動”に参加した。栽培や物づくり等の体験活動の中で、学習した事を身近な事象に置き換えて発展して考えられるよう計画した。
- ・一人ひとりが課題意識を持ち、主体的に活動に取り組む姿を引き出すためには、疑問を解決する活動を取り入れることが、児童の学びを深めるきっかけになると考え、「一粒のタネからいくつのタネができるのか」という児童からの疑問を解決するために、ヒマワリのタネを数える学習課題を設定した。
- ・「野菜も植物であるから、実を食べているものもあるのか」という疑問を話し合うために、ピクチャーカードを用意したり、ペア学習を取り入れたり、友達と考えを交流する場を設定した。

### 【成果】

- ・児童の疑問をもとに、学習課題や活動を設定したことにより、児童が課題に対して主体的に考えられるようになり、「なぜ？どうして？」という疑問が多く出てきた。さらに、その疑問を探究する場が設定されたことや、疑問が解決されたことにより、充足感が生まれた。
- ・実物をもとに観察をしたことにより、理解が深まった。
- ・ピクチャーカードを並べる活動では、自然と自分と友達の考えを比べている児童が多くいた。友達に伝えたい、友達に考えを聞きたいという気持ちにさせる課題設定ができていた。
- ・身近な題材であることから、これまでの学習経験や生活経験をもとに考えている姿が多く見られた。
- ・生活経験のばらつきが、対話への効果をもたらしたと感じた。植物に詳しい子、畑で見たことがある子、お料理を手伝ったことがある子が学びを深めるきっかけを作ったのでよかった。
- ・あたたかい雰囲気の中、楽しんで学習していた。授業者も楽しく授業できた。

### 【課題】

- ・幅広い範囲の話合いになることが多く、話合いの視点を絞ってもよかつた。
- ・野菜の中には、実とタネの区別がつきにくいものがあり、話題の重点を明確にした方がよかつた。
- ・前後の学年とのつながりを考え、子どもたちの思考を深める発問を考えるとよかつた。

### 質疑応答

Q “ピクチャーカード”とは、どのようなカードなのか。

A 芽・つぼみ・葉など、野菜のどこの部分を食べているのかがわかるような写真のカード。写真を印して小さく切

ったもの。緘黙の児童がいたが、カードを並べるだけで、言わなくても隣の人のカードと自分のカードを見比べることことができたので良かった。また、話し合ったり、黒板で整理したりするとき見やすくて良かった。

Q 生活科からのつながりとこのとだが、理科と生活科は似ているようで違うところがあるが。

A 生活科との関連は、体験的な活動を多く取り入れることが一番に言われていると思う。個人の想いと科学的な見方という両方の側面を3年生になってからは大事にしていくことがいいのだが、比重的には科学的な見方・考え方を育てていった方がいいと思う。生活科での経験をもとに問題解決の過程へ問題を追究していくことが求められていると解釈している。

Q 話合いの焦点がしほれなかったときに、具体的にどうだったのか。

A “ヒマワリやホウセンカ以外の植物にも、たねはあるの？”で、子ども達から色々な意見が出てきて、調べる時間もすごくかかってしまったので、コンパクトにできたらよかったです。授業者も、この活動を通して何をどのように明確に持っていたことも反省点。しかし、この学習でお米もたねであることや球根のことも知ることができたので良かった。

Q ピクチャーカードは、野菜の全体の写真ではなく、野菜そのものだけの写真か。

A 野菜が育っている全体の写真だと、答えが出やすいので、去年の生活科の学習も話題になるといいなと考え、敢えてそのままの実だけを写真にした。

### まとめ概要

- ・学習指導要領変遷の中で、生活科が入ってきていているというのは、自然経験が少なくなってきた中で気付きを大切にしてほしいということから始まっている。
- ・「すごいね。不思議だね。なんでだろうね。」で終わっていたことが、3年生になって、それを自分たちで問題を解決し、徐々にそれをステップアップしていくことが非常に大事。
- ・レイチェルカーソンの著書、“センスオブワンダー”の中で、科学する目は、幼少期に育てておかないと、見えるものも見えなくなってしまうということが載っている。
- ・今回、どこにゴールを設定するかは、今後検討していく必要があるが、子どもの気づきから調べられる手立てとしてのピクチャーカードは、とても効果的だった。
- ・他の教科とつながることによって、効果を最大限に活用できるカリキュラムマネジメントは新学習指導要領でも重視されている。また、予測不能な社会の中で、今の学校教育だけでは将来を担っていく子どもを育てきれないで、大人を総動員して学校が中心となって教育課程を社会に開いていくことも大事。
- ・長かった梅雨で、大豆が育たなかつたから代替品を買おうだけではなく、「野菜が高い」というおうちの方の話などから、子どもの中に、いのちや生活が意識されるのではないか。
- ・作ったものを食べるのはアレルギーなどもあり難しいので、給食の自校献立の中に入れもらったり、持ち帰って保護者に判断してもらったりするなどの方法もある。
- ・院内学級の子や、障がいを持った子たちへの個に応じた対応として、授業に参加したいという子は、参加できそうな折り合いをつけ、インクルーシブ的な視点から、一声ひと手間を先生達で考えてくれると、そういう子達も参加しやすくなる。

# 概要報告

実施期日	7月29日(月)【午後】
部会名	小学校 生活部会

## テーマ

## 『スタートカリキュラムを意識した生活科での取り組み』

### 提案概要

提案者の学校で毎年恒例になっている行事「〇〇ひろば」。1、2年生が地域の保育園年長児を招いて校内探検やお店屋さんごっこを行っている。校種を超えた異年齢交流の貴重な機会でありながら、その前後の育ちとの関わりが教育課程上十分に反映されていないという課題意識を持ち、スタートカリキュラムに繋がる実践を構想した。

### 【実践の概要】（1年生）

#### 学習指導計画

事前学習 ○友達と協力して、仲良く過ごすこと（協同性）

○自分が考えたことを言葉で伝えること（言葉による伝え合い）

① 計画をしよう ○どのような学習をするか、学習のゴールをイメージする。

・<学校の良さを伝えるために> 歌、折り紙、お話 → プレスレッドづくりへ

② 準備をしよう ○〇〇ひろばに向け、準備をする。 ○活動の記録をする。

・プレスレッドづくり ・学校再探検（ロールプレイング）

③ 〇〇ひろばをしよう ○保育園児や2年生と活動をする。 ○活動の記録をする。

・12グループに分かれて魚つりなどのお店屋さん

・園児への優しい声かけ、荷物を持ってあげる姿

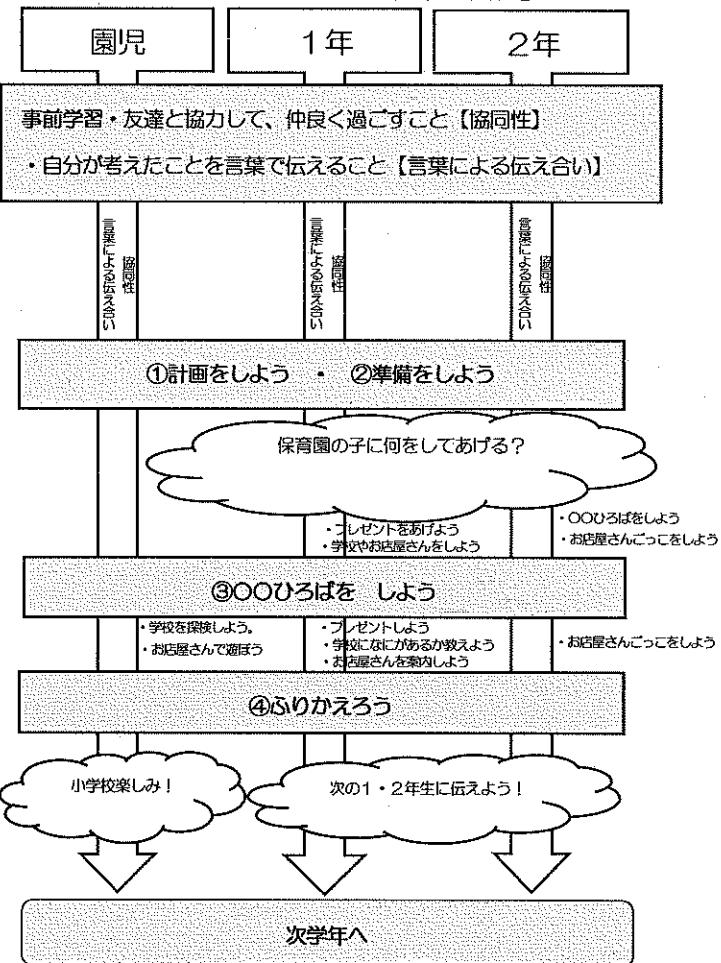
④ ふりかえろう

○活動を通して考えたことなどを記録する。

### 【実践上の工夫】

- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿のイメージ」  
うちの「協同性」や「言葉による伝え合い」を育ちの軸として活動をすることを保育園と小学校の共通の認識として事前に周知した。
- ・園児を招くにあたって、「〇〇ひろば」のイメージを共有し、児童ができることややってみたいことに主体的に取り組めるよう、全体での話合いを大事にした。
- ・児童間で伝え方を考えたり、ロールプレイングをしたりして、意見交換や伝え合いをおこなう時間を確保した。
- ・「〇〇ひろば」内の1年生のメインの仕事として校内案内がある。4月に自分たちのために行った校内探検を2月にもう一度行うことで、自分たちが保育園児の案内ができるよう、内容を整理し、計画をしたり予行練習をしたりするなど、本番に備えた。
- ・実施後、それぞれの学年で「〇〇ひろば」の中で気付いたことやアドバイスを、次の学年へ送るようにまとめた。
- ・保育園からは園児の感想と、保育士の気付き（改善点等を含む）を学校にフィードバックしてもらい、これについても1年生への評価として受け取り、次年度の活動についての留意点として残した。

### 【〇〇ひろばにおける各学年の流れ】



## 【成果・変容】

- 保育園**・1年生や2年生に自分の思いを伝えたり、一緒に「〇〇ひろば」に取り組んだりして、安心して小学校に通えるような基盤ができた。
- ・「〇〇ひろば」を体験した園児（今年度入学した1年生）が、知っている教室について周りの児童に教える姿が見られた。
- 1年生**・学校のものに興味をもつようになり、見たものや気付いたことについて話すことが増え、児童が積極的にみんなの前に立って話すようになった。
- 教育課程**・今回のフィードバックを次年度の「〇〇ひろば」に引き継がれるように残した。

## 【課題】

- ・この活動が教育課程上組み込まれ、引き継がれるか。

## 質疑応答

- ・〇〇ひろばを経験した園児はどのくらい入学するか。  
→65名中20名弱。
- ・保育園との打合せをどのように持ったか。  
→電話、書類で学校側の意図（「共同性」「言葉による伝え合い」を育ちの軸におこなうこと）を共有した。

## グループ協議（各校の教育課程上の工夫について）

- ・1・2年生それぞれの目的を明確にし、園児の不安への働きかけができるとよい。
- ・小学校側のスタートカリキュラムとともに、就学前のアプローチカリキュラムについても理解しておく必要がある。
- ・「言葉による伝え合い」は難しい。「豊かな感性」でもよかつたのでは。
- ・大規模校では実施に難しさもある。小規模校だと定期的に交流活動ができる。
- ・担当の熱量によって取り組みに差が出てしまいがちである。
- ・引継ぎの工夫を教えてほしい。  
→共有フォルダでデータを引き継ぐとともに、担当の「思い」も文章に残す。

## まとめ概要

- ・ポイント① 「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」から2つを取り上げ、それを高めたうえで、「〇〇ひろば」に取り組んでいること。
- ・ポイント② 「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を意識した指導を小学校で行っていること。
- ・このような取り組みは、小1プロブレムへの効果も期待できる。
- ・「わたしのお気に入りポイント」を伝え合う国語の授業への展開も考えられる。
- ・地域との連携の観点からも、学びがつながる素晴らしい実践であった。

# 概要報告

実施期日	7月29日(月)【午後】
部会名	小学校 音楽部会

## テーマ

## 『思いをもって歌うことが好きになる 低学年の歌唱指導』

### 提案概要

1年生の4月、歌うことが大好きで意欲的な児童であった。ただ大きな声で歌うだけではなく、思いをもって歌うことができるようになってほしいと考え、子どもたちが曲について相談し合い考えをめぐらせられる活動を取り入れることにした。そして、感じ取ったことを言葉で表現する言語活動を年間通して行うことができるように次のように計画を立てて指導した。

4・5月・・・教科書の曲に加えて、みんなで声を合わせて元気よく歌えるように、「さんぽ」「勇気100%」「ドラえもん」など、子どものよく知っている歌いたい曲を歌った。

6・7月・・・授業の導入で発声の基礎や姿勢に気をつけてきれいな声で歌えるように指導した。背伸び、首回し、顔ほぐし、グネグネジャンプなどの軽い体操で体をほぐしてから、「君をのせて」「にじ」などを歌った。「君をのせて」の一部分では頭声発声ができるように指導した。また、上手にできている子どもに模範を示させ、声の変化に気が付かせ意欲を高める工夫をした。

9~11月・・・「つばさをください」を歌ったり、市内合同音楽会に向けた「1ねん1くみ1にちのうた」という学級の歌づくりをしたりして、歌詞の内容を意識して歌えるように指導した。「曲間にハンドベルやタンバリンの音をいれよう。」とか、「ここはこういう風にした方がいいのではないか。」などの意見が子どもたちの中から出たり、休み時間にも歌ったり活発に取り組む様子が見られた。

11月以降・・・思いをもって歌えるように、入学式での歌の発表を見据え、頭声発声で歌うことや響く声を出すことを意識させ、歌唱の指導を行った。

### 【実践】

始めに「おどるこねこ」の鑑賞を通して、楽器の音色や旋律、リズムから場面の様子や情景を想像し、曲に合わせて体を動かす活動をした。はじめは「ねこ」という言葉だけに注目し身体表現していた子どもたちだったが、中には曲想に合わせてダンスのように踊っている子どももあり、曲からその情景を想像することができていた。

次に、他教科との連携で図工の授業として、本時で取り組む「はる なつ あき ふゆ」の歌詞を大きな絵にする活動を行った。子どもたちは言葉からイメージして絵を描く活動を楽しんでいた。

本時の活動では、歌詞と図工で描いた絵が結び付き、子どもたちは興味をもって歌い始めることができた。各季節の様子を思い出させてから、音読、音取りをして、歌えるようになったのち、グループに分かれて、どのように歌いたいか考えた。歌詞を印刷したプリントに思いついたことを書き留め、その後学級全体で共有した。子どもの発言から、『きらきら』という言葉は「明るく輝いたように歌いたい。」「きれいな声で歌えばいいのではないか。」や『ざぶん』は「大きく海に潜るように歌いたい。」など、歌詞をイメージする様子がうかがえた。また、『ふわり』という言葉はイメージしにくいようだったが、国語で既習した「くじらぐも」を思い出し、「わたのようではないか。」など、子どもたちで考えを深めることができた。

実践を通して、歌詞の中の言葉を大切にし、歌い方を工夫することで子どもたちは表現する楽しさに気付くことができた。また、思い描いた様子を表現しようと声を出したりすることで、子どもたちの歌への取り組み方が変わったように感じた。言葉をひとつずつ取り出し、様子を想像し工夫したことで、子どもたちの深い学びに繋がったと考えられた。

### 質疑応答

- ・低学年の先生の立場からすると、中学年、高学年では発達段階に応じて音楽の授業でどのように育ててほしいか。  
→中学年では声が出ていない状態だと困る。恥ずかしさを感じることなく「歌うことが好き」「歌うと楽しい」という気持ちを持っていることが大事だと考える。高学年では棒読みのように歌ったり、強弱をただ楽譜のとおりにつけて歌ったりするのではなく、意味を考えて、曲の山や、フレーズを感じて歌えるようにしたい。最後の卒業式では自分が表現したいことが歌で表現できるようになってほしい。

- ・音楽づくりについて、教科書では偶然できる音楽づくりが中心になっているが、思いや意図をもって音楽づくりをすることについてどう考えているか。  
→音を線でつないでみようという教科書以外の音楽づくりの実践はしていない。理論から音楽づくりをするのは小学生には難しいのではないかと考えている。和音のひびきの中から音を考えて音楽づくりをしている実践例を聞いたことがあるが、ひびきの中から感じ取ることがいいのではないかと考えている。
- ・他学年の歌を聴く機会はあるか。  
→音楽朝会はないが、年に1度、高学年の音楽会があり、低学年も合奏と合唱を聴くことができる。教室にもどつてきたら、口ずさむなどの反応を見ていて他学年の演奏を聴くことは大事だと考えている。
- ・頭声発声を低学年から取り入れているが、音楽専科はいるのか。いない場合はいつ頃から頭声発声を取り入れるか学校として統制をとっているのか。  
→現在音楽専科はいないため、学級担任が音楽を教えていた。学年によっては交換授業を行って対応している。頭声発声について、学校としての統制はしていない。自分自身が児童合唱団の経験があるので低学年からでも頭声発声はできると考えている。曲の全部は難しいが、部分的に頭声発声ができるよう、ミッキーマウスの声まねやあくびの声を用いて、教えていたらと思う。特に高い音域は頭声発声のほうがきれいなひびきであるし、高学年だと地声では出なくなる。出なくなったから歌わないということにならないように頭声発声もできるように練習しておくとよいと考える。
- ・指導案では4時間扱いとなっているが、実際にかかった授業時数は何時間か。  
→活発な意見交換の場面が見られたり、いろいろな歌い方を試行錯誤したりしたため、鑑賞に3時間、歌唱に3時間、計6時間かかった。

### 研究協議概要

#### 【低学年での評価の見取りをどのように行っているか】

- ・音楽が嫌いにならないように指導し、2段階評価ならぬらいに沿って参加していればA、そうでなければBとしている。
- ・文章で書かせると国語力の評価になってしまう場合がある。いろんなことを感じているはずなので言語活動に偏らないように気をつけている。鑑賞では絵で表現させることがある。まず活動に参加している、それ以外の見取りは一人ひとりをよく観察することが大事である。グループ活動をさせているときに発言が苦手な子どもを見取ることができる。
- ・音楽専科は担任と違って日常から関わないので、小さな子どもの変化がわからないときがある。表情の変化を見逃さないように見取りを大切にしている。鑑賞の授業では音楽だけでなく映像を見せると、音楽のよさや特徴が子どもに伝わりやすく、表現しやすくなる。
- ・低学年の評価は確かに難しい。歌唱は一人ずつ歌わせている。器楽は一度にたくさん演奏するのが大変だから、一段できたらスタンプをもらえる方法で行うと意欲が高まる。鑑賞は文章表現が苦手な子どももいるので、ヒントとして言葉を表示したり、強弱、使われている楽器、音の高さなど聴く観点をはっきりと伝えたりして聴かせる必要がある。
- ・低学年でCをつけて音楽が嫌いになるのは避けたい。よいところ、できるところを見取り、高学年にむけて指導したい。今までの音楽の授業は技術面重視で行われている。新学習指導要領では学びに向かう力が大切になってくるので見取り方も考えていく必要がある。音楽がやりたくなる、リコーダーが苦手な子もできるようになるような授業改善をしていきたい。

### まとめ概要

音楽の授業は学級担任が行う場合と音楽専科が行う場合がある中で、立場によって音楽の評価の見取り方は確かに難しい面がある。担任が行う場合は学年で評価規準や見取り方をそろえる、音楽専科の場合は日頃の子どもの様子を学級担任に聞いて把握するなどの必要がある。言語活動に偏ることなく、一人ひとりの様子をよく観察し変化に気付くことが大切である。音楽が嫌いにならないように指導と評価の一体化を日頃から意識し、様々な手立てを準備して子どもたち全員を音楽に向かわせることができるように教師が導くことが大事である。

# 概要報告

実施期日	7月29日(月)【午後】
部会名	小学校 図画工作部会

## テーマ

## 『つくり出す喜びを通して豊かな心を育む』

## 提案概要

○題材名と学年 「Face To Face」 第4学年

○子どもの実態と題材について

「自分は絵が下手だ」と苦手意識を持っている子どもが多い。そこで、子どもが創造的に作品をつくる喜びと自分の作品に対しての自信が得られる題材として、画用紙を使って自分の考えた不思議な顔をつくる題材を考えた。一枚の黒画用紙から、口や目をつくり、そこから色画用紙を使って色を組み合せたり、様々な形のパーツを組み合わせたりして、創造的につくり出す喜びを感じさせたい。そして、単元を通して友達の作品を鑑賞したり、自分の作品をクラスの友達や交流先のスウェーデンの小学生に紹介したりすることで、自分や友達の作品の良さを感じ取れるような、豊かな心を育む学習にしていきたいと考えた。

○授業を振り返って（提案者より）

- ・色画用紙で切ったものを重ねたり交差させたりするという子どもの独自の発想に驚いた。
- ・提案者は、黒画用紙（顔）のまわりに色画用紙を貼っていくのではと予想したが、実際には、黒画用紙（顔）の中に色画用紙の細かいパーツを貼る子が多いのが意外だった。
- ・黒画用紙（全身）のまわりに色画用紙を背景のように重ねることを思いついた子がいた。紙の重ね方、貼り方、裏打ちの仕方をどのようにすればよいか、子どもたち同士で考え方話し合い活動に繋がっていった。

○成果と課題

本単元を通して、ねらいは達成できたと思う。子どもたちが作品制作に楽しんで取り組み、作品への愛着をもてたことで、一人ひとりの自信に繋がった。それが、他教科や日常生活においても良い影響になっているようを感じられる。

## 研究協議概要

【提案者より】 材料と作品づくりに向けてのジレンマ

- ▲ 材料にお金をかけることが予算的に難しい。
- ▲ 材料を集めて置いておく場所を考えたり設置したりするのも一苦労。
- ▲ 教材を頼むと、みんな同じような作品になってつまらないのではないか。
- ▲ 材料が少ないと、良い作品にならないのではないか。

他の先生方はどんな工夫をしているのか?  
アイデアがほしい。

【各グループより】

- ・材料が少なくとも、工夫次第で作品づくりはできる！  
(例：教師が例をいくつか提示する。子どもからのアイデアを募る。ある物の中で工夫させる。)
- ・材料をわざわざ買わなくても、身近なもので活用できるものはたくさんある。  
(例：木の実、新聞紙、広告チラシ、紙パック、プラスチック容器、貝殻 等)
- ・子ども自身が材料集めをすることによって、作品づくりへの意欲が上がり、イメージもわく。

- ・事前に各家庭や地域に連絡・お願いをしておくと協力してくれる。(学年通信、学級通信、ポスター等)
- ・日頃からむだ使いをさせない指導をすることが大切。  
(例:雑紙や材料の切れ端は、捨てずに活用する。分別もしっかりと指導する。)
- ・材料を集める場所 … みんなで使える“シェアコーナー”をつくり、そこに集める。
- ・お金の件 … 市町村によってやり方が大きく異なるようだが、例えば学級費でやりくりする、事務から各教科の予算で出してもらう、各市町村の教育委員会に予算の拡大要求をする等、工夫が必要。
- ・教材キットについて … キットならではの良さがある。  
(例:全員同じ材料だから、自信のない子どもへの配慮になる。作品づくりのイメージがしやすい。ランプなど家庭から集めにくい材料も用意できる。一人分で使える量の目安がわかる。 等)

#### まとめ概要 (指導主事より)

- ・参考資料 … 「材料や図画工作科で扱う用具」 文部科学省 HP より  
材料や用具の活用法や使用時の注意点等、分かりやすく提示しており、参考になる。

# 概要報告

実施期日	7月29日(月)【午後】
部会名	小学校 家庭科部会

## テーマ

## 『人間性豊かで たくましく 生きる力を育む家庭科教育を目指して』

### 提案概要

#### 〈実戦に向けての課題意識〉

「わくわくミシン」の単元では身の回りの生活に役立つ、布を用いた物として、エプロンの制作を行う。これまでの学習では、決められた学習活動にはルールに従って取り組むことができる一方で、学習に向かう姿勢は受動的になりがちで、主体性に欠ける面もあった。エプロンは、児童にとっては、中学生になっても長く活用できるものである。そこで、丈夫で着心地のよいものを製作するために、観察と実習を繰り返し、その中の気付きを自らの製作に生かしていくこうとする態度を育てるため、本単元では不織布で実際に試作する活動を取り入れた。また、教え合い、互いの力を生かし合って活動することで個々の力を高められると考え、グループ学習を取り入れた。

#### 〈実践概要〉

- ・一学期の学習では、手縫いで小物の製作を行った。児童は、「入れたい物が大きくて入らなかつた」「壊れてしまつた」「もっと丈夫な物を作りたい」などの課題をもち、ミシン縫いの学習へとつなげた。
- ・二学期の初めに「わが家ウォッキング」と題して、家庭にある布製品を観察する学習を行った。そこで児童は、生活の中には布製品が多く、毎日使っている身近な物であること、そして、それらのほとんどがミシンで縫われているという新しい気付きを得た。
- ・次に、布の特徴とその用途の違いについて調べ学習を行った。普段何気なく使っている「体操服」と「給食の白衣」の違いについて調べ、それぞれの布が使われている目的や役割の違いについて意見を交換し、布の特徴を理解することができた。
- ・また、手縫いとミシン縫いを比べ、それぞれの長所や短所を探っていった。そこでは、時間・縫い目・丈夫さ・糸・準備・ぬい方・安全面についての意見が挙がった。さらに、ミシンの技術について学ぶ前に、ミシンの歴史や仕組みの学習も行い、「ミシンを使ってみたい」という気持ちの高まりにつながった。
- ・ミシンの基礎・基本の学習では、ペア活動を取り入れた。ミシンの糸かけを写真付きの説明書を使って、ペアで確認しながら活動することで、不安を減らすことができた。また、教え合うことで、互いの力を生かして活動することができると共に、個々の力を高めることもできた。
- ・基本を学習したところで、「わが家の家事のプロ」として家族にインタビューをしたり、中学校の家庭科の先生からの情報として、調理実習や野外体験教室でも小学校で製作したエプロンを使っていることを聞いたりすることで、エプロンに対する思いを高めた。その上で、不織布を用い、エプロンの試作を行った。
- ・お試しエプロンの製作から、児童が考えた作り方のポイントを意識できるように掲示物を作成し、また、併せてミシンの使い方のポイントとしてミシンの画像を掲示し、児童がいつでも確認できるようにした。
- ・自分の思いと体に合ったエプロンを作るために、仲間と協力して丈を調整したり、中学校でも使えるようにそそを切らずに折って長めに残しておいたりと、それぞれの思いや願いを実現させるための深い学びのある製作につながった。
- ・エプロンが完成すると、お披露目会を行った。互いにアドバイスし合い、高め合う言葉をかけあうことができた。
- ・調理実習などでエプロンを実際に使用し、どんなところにポケットをつけたいか計画を立てた。思いや願いにあつたポケットを製作しようとする中で、プリントや掲示物で振り返りながら学習を進める姿が見られた。
- ・授業の最初と最後には、個々の失敗から学ぶ「武勇伝」を聴き合った。また、空いた時間でイニシャルや名前、絵文字の刺繡をしたり、アイロンで飾り付けをしたりした。
- ・そして、オリジナルエプロンの使い心地を調べるために調理実習を行った。エプロン製作の振り返りをし、6年生の学習への意欲につなげた。

## 研究協議概要

〈テーマ「もっとやりたいという意欲をかきたてる教材教具の工夫」「学習活動の構成の仕方」について〉

- ・家庭科の学習では、多くの単元で人手や教材教具の工夫が必要である。学習を授業参観日に設定し保護者からのサポートを受けたり、休み時間に玉どめ、玉結びの練習をしたりするとよい。「上糸下糸マスター」の取組は、分かりやすくて良いと思った。また、作業の手順を提示するのに書画カメラでは不安があるので、動画を準備し、作業場面をいつでも再生できるようにするとよいのではないか。グループの上手な子に教えさせる取組もよい。ただし、手助けをしそうないように注意する必要がある。
- ・お金の使い方の学習→実際に買い物をする→調理実習の流れは、消費生活から調理へと学習につながりが生まれる。自分でメニューを考え、自分たちで食材を買うなど、単元の垣根を超える学習は効果的である。タブレットで料理名、レシピ、食材を調べてプレゼンテーションを行う学習もよい。グループでの話合いで、お店ごとの値段、産地、いろいろなどを決定し、クラスで料理を一品決める学習もよい。結果として、お金を大事に使う、食材を大切にする気持ちなどにつながった。
- ・ミシンメーカーなどのようなプロに教わるのもよい。試作をすることは、ワクワクしながらも不安感をもって学習しているので、大事なワンステップだと思う。ただし、設備面は学校によってさまざままで、ミシンの台数も違えばクラスの人数も違うので、難しい実情もある。ただ作るだけでなく、目的をもって製作できるような指導計画を立てる必要がある。
- ・「クリーン大作戦」と題して学習をした。学校、家、学校の順番にやると、学習が学校内にとどまらず、学習したことが生活にも生かされる。いろいろな道具を使うことで達成感が得られて良かった。
- ・「玉どめで模様作りをする」「模造紙とスズランテープで縫い方の見本を見せる」学習は、練習になってよい。6年生の卒業制作では、ただ指示を受けて作るのではなく、ぞうきんやウォールポケット、不審者対策の目隠し布の製作など、目的をもって取り組めるとよい。
- ・ナップザックとエプロンの、どちらを先に製作するかということについては、エプロンの方がより生地が薄く、縫うところは直線が多く容易なため、エプロンを先に製作するのではないか。ランチボックスを作ったときは、調理実習でお弁当箱に詰めて屋上で食べたこともあり、好評だった。玉どめ、玉結びの指導はどのような工夫があるか。「なわとび結び」「おべんとう結び」でもよいのではないか。できないと意欲が下がるので、針を使わずにとまればよいのではないか。
- ・「ミニ先生」には腕章を用意すると意欲が上がってよい。「糸かけの時間」はタイムを測ると意欲が上がる。成功体験がもっとやりたいにつながるので、不織布のエプロン試作品のようなおためしは重要だと思った。「我が家ウォッチング」は座学だけないので、意欲の向上につながると思った。

## まとめ概要

今回の取組では、子どもたちが楽しく学習に取り組んでいることがよくわかった。新学習指導要領では、実践的体験的な活動から知識技能を得ることをねらいとしているが、今回の提案では、そのための仕掛けが多くあった。「我が家ウォッチング」は、課題を見つけて解決に向かう学習へとつながった。手縫いで小物づくりは、失敗をそのままにせず、ミシン縫いでエプロンづくりに生かすことができていた。また、児童自身にどんなものを作りたいかを考えさせることはとても重要で、主体的な学習態度へとつながった。中学校と連携したことで、小学校での課題を明らかにすることことができていた。何のためにやるのか、目的を明確にして指導することの大切さがよくわかった。ＩＣＴの活用としては、作業手順の映像の活用、動画、ウェブページの活用が考えられる。教材の工夫としては、不織布の活用で、気付くことがたくさんあった。

協議では、他校の取組を聞くことができた。消費生活、買い物、衣食住すべてに関わるので、様々に関連させながら授業をし、子どもたちにも視点を与えるとよい。また、家庭科室の点検をし、作業が進めやすい環境を整えることで、子どもたちの作業への意欲につながるため、きちんと行ってほしい。大きな見本用のボタンなど、教具等を次の代に引き継ぐと時間短縮ができるよ。エプロンとナップザックのどちらを先に製作するかについては、「袋物」で、大きさとゆとりの必要性を学び、その後エプロンを製作する方が簡単であるとも考えられる。また、作成する物は必ずしもナップザックでなくてもよい。キットを活用することも多いが、自分たちで材料を選んでも良い。失敗には原因がある。失敗の原因を知って、次に生かすことができるようになることが大切である。

# 概要報告

実施期日	7月29日(月)【午後】
部会名	小学校 体育部会

## テーマ

『運動の楽しさや喜びを味わい、ともに学び合う姿をめざして  
～かかわりながら、「わかる」「できる」を目指す体育学習～』

## 提案概要

低学年のほとんどの子どもたちが体育の授業を楽しいと思っているのに反して高学年の子どもたちは、マット運動を中心にネガティブにとらえている子が多くいた。高学年でも楽しめないかと思い研究に取り組んだ。「いま求められている教師の『教え』は、能動的にかかわり合いながら学ぶための環境をデザインすること」（体育における「学び合い」の理論と実践：梅澤秋久）の理論を参考に授業づくりを行った。授業を改善することで、互いにアドバイスし合いながら、運動に夢中になる、没頭する「学び合い」を目指した。

## 【実践の概要】

1. アンケート実施 アンケートをとることでどうやって授業として取り組んだらよいのか考えていった。

- ・低学年：体育の授業が楽しい。
- ・高学年：苦手だと感じている。

※マット運動に関しては低学年に比べてネガティブな気持ちの児童が6倍に増加している。

⇒どうしたら高学年でも楽しめるかを考える。⇒『学び合う姿を目指す体育学習を目指す』

2. 学び合いの理論 外部講師の教えを共通認識して取り組む。

今まででは数値的な体力向上を目指していたが、好き嫌いの二極化につながっていく。

現在は競技志向や、健康志向、それ以外の人がかかわりあいながら学ぶ必要性がある。

- 教師が「これをやるとできるよ」（プログラム型・スマールステップ）から児童中心の授業へと転換  
児童が運動に夢中になる、没頭する『学び合い』を目指す。

3. 「学び合い」に向かう手立て

- オープンエンドなテーマ設定

・プログラム型ではなくプロジェクト・テーマ型 これができたらプロジェクトとしてテーマを与え、児童が探求できるようなテーマを設定する。

- 場の設定

・児童がより夢中になるような場をいくつか設定する。

- 児童の活動時間の確保

・教師が指導する時間を短くし、児童が考え活動する時間を大幅に増やす本時の展開

- ターンバック

・活動に夢中になっていく児童が授業のテーマを意識できるように教師がテーマやキーワードを繰り返し発言すること。

## 【成果】

テーマに向かって、児童が運動を考え、その運動に夢中になることができた。そして、運動量の増加や基礎感覚の一層の定着、楽しいと感じる児童が多くなった。楽しいと感じる児童は、技ができるかできないかの狭間を楽しんだり、運動の特性を楽しんだりすることができた。

オープンエンドの指導法によって、あと少しで自分ができそうだと感じた技を児童が選択することができ、集中的

に練習できたことがよい結果に繋がったと考えられる。

自由に場の選択ができたので、得意な子はさらに技を磨き、苦手な子にとっては、得意な子に自由に声をかけ教わることができ、最後まで目標をもって挑戦し続ける学習だったと推察される。

—今後に向けて—

場の設定やテーマ設定などを研究していき、低学年から回転感覚や逆さ感覚を身につけていけば、体の使い方が分かり、恐怖心も薄れるのではないかと考える。

### 【課題】

クローズエンドに比べ、より安全面を配慮することが求められる。

めあてに対しての評価方法がクローズエンドのように一人ひとりの技を見ることができないため、授業のテーマ、評価設定が難しい。

—今後に向けて—

安全面の配慮を伴う場の設定を行うには、マットやエバーマット等の補充が必須である。また、オープンエンドな指導法を他の単元、他の教科でどのように扱えるのかも視点に入れていく。

### 質疑応答

・高学年の場の設定を知りたい。

→ステージなどからロングマットを垂らして下にエバーマットを敷くことやロイター版とエバーマットをつなげることでジャンプしたりする感覚を身につけることができる。また、肋木の前にマットを敷いて逆さになる感覚を養うこともできる。

・今回高学年のマット運動を終えた後のアンケートではネガティブなイメージを持っている児童が20%残っているが、その理由が知りたい。

→児童には体格差があり、技能が一気に伸びることがないため。できる子は楽しいが、できない子にとっては「自由にしてって言われても何をしたらいいの?」と思っている。他教科でも「自分たちでやっていこう」が身についていかないと難しい。

・3年生のテーマ「両手をつけて回る」は指導要領との整合性があるのか。また、新学習指導要領だと難しい技も増えている。やらなければならないのか。

→目当てに達成できるように徐々に力をつけていく。好きになっていくと集中しうまくなつていき技も増え選択肢が増えていく。技の名前は最後に教える。

### グループ協議での感想・意見

・オープンエンドにすることで、子ども自身がどんなことが課題かわかっているのか。

→先に技に対する知識を身に付けたうえでオープンエンドにしないといけない。そうすることで、自分のできないところを知る。

・評価がつけにくいのではないか。

→全時間オープンエンドではできないかもしれない。今年度は前半オープンエンドにしていた。低学年だと始めからオープンエンドは無理だったので教えてから始めた。

・中学校へ行ったときにやっていない技が出てくるのではないか。

→「この技ができるように。」と子どもに知らせている。体育の時間を通して「みんなにつけたい力やこんな集団になつてほしい」という話をしている。

### まとめ概要

・指導要領的には最終的にはクローズエンドだが、オープンエンドの良さがある。

・種目にプラスのイメージを持って中学校へ行くことができる。小さいことを価値づけてあげることや、遊びの途中で必ず価値化してあげるとよい。そうすることで、子どもたちがどの方向に向かつたらよいのかがわかる。

# 概要報告

実施期日	7月29日(月)【午後】
部会名	小学校 道徳部会

## テーマ

### 『考え方、議論する道徳の授業づくり～教科書を用いて～』 (「ブランコのりとピエロ」光村図書 5年生)

## 提案概要

学校教育研究会の道徳部会にて「よりよく生きる心を育てよう～考え方、議論する道徳～」をテーマに研究をしている。

年間指導計画から、子どもたちの実態に合わせて、「相互理解、寛容する気持ち」を育てようとした。子どもたちが考え方、議論するために2つの授業の工夫を行った。

- ① 子ども自らが授業のねらいについて考えをもつ
- ② 互いに意見を言い合い理解し合うことで、自分の考えを広げ深める

教科書教材を生かし、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にするようにした。①に対しては、3色カードを使用することで、それぞれの意見を明確にし、理由を聞くことができた。②に対しては、本時を2時間扱いとし、同じ場面で、違う登場人物の目線に立った気持ちを考えさせるねらいとした。

授業中に、様々な立場を知り、意見を変え、自分の生活に置き換えて話す児童が見られた。

課題として、個人の深化はあったが、全体の交流の時間が取れなかった。

## 質疑応答

○どのように登場人物の視点を別々にさせたか。

→1時間目には、ピエロの視点で書かれているため、ピエロの気持ちを考えた。2時間目には、他の立場を考えさせるため、2時間目にはサムの視点にした。

○授業中の子どもたちの見取りについてどのようにされていたか。

→サムの気持ちを理解して、お互いの気持ちを比べて似ているところを出させ、個々の気付きがあった。

○題材への入り方は内容項目を話してからか、直接入ったか。

→子どもたちの成功・失敗経験を話させ展開に入っていた。

○子どもたちをどのようにゆさぶろうと思っていたか。

→子どもたちは、サムが悪者に考えていたため、サムの立場を考えさせた。サムの気持ちを知り、相手が考えていたことを想像し、意外性に驚き、相手の立場に寄り添うようにした。

○授業中の主発問はどれか。

→二人の気持ちから気づくことはありますか。(二人の共通点や相違点に気が付くようにするため)

## グループ協議

○授業では、考える場面の工夫や議論させる・本音を出させることが難しい。

→役割演技・アンケート・フリートークなどを取り入れ、みんなが考えたことを歩き回って意見交流をする。

○価値項目を2時間扱いにする。

→話すこと・書くことじっくり時間をかけられる。しかし、子どもの考えを誘導しているように見える。短く一時間にまとめるやり方もあった

○同じ教材で目線を変えて授業する。

→他人の立場を理解する。

○授業の終末について

→みんなの意見を認め合える声掛けを先生が行って終わるようにする。

○目線を分ける、時間をかける。

→多面的、多角的にするために丁寧に相互理解できた。

○みんなが参加できるようにしたいならないように(3色カードなど)工夫することがよかつた。

○評価については気づき、考えたことについて書いていきたい。

○価値項目を単元としてみることの面白さを感じた。（子どもたちからも前の話からも出たため）

○子どもたちが登場人物になって客観的にとらえて考えることは、どうだろう。（自分事としてではないと言わなくてよい）

## まとめ概要

◎道徳教育について

2020年度から学習指導要領が改訂される。学習したことを利用して自分の生き方を切り開くことが目標となる。どう学ぶか、主体的、対話的で深い学びからよりよく生きるように、より良い人間性を得られるようしていく。道徳の内容のポイントでは、内容的資質である道徳的判断力・道徳的心情・道徳的実践意欲と態度を養い、育んでいく。

◎道徳の授業について

ルールを言って行うのは、押しつけ道徳。自己との関わりで、テーマについて主体的に考えを深め、議論して多面的、多角的に共に語り合う道徳にしていく。

◎道徳の評価について

指導の改善、充実のために教師自身が自らの授業を振り返り行う。児童にとっては、自らの成長を実感し、意欲の向上につなげていくことが大切である（内面・行動の記録ではない、認め励ましのものである）。書けなかつたり、話せなかつたりする児童には、小さな活動でも授業に参加できるように支援し、評価することが必要である。

# 概要報告

実施期日	7月29日(月)【午後】
部会名	小学校 外国語活動部会

## テーマ

## 『小学校外国語活動と中学校英語のつながりを意識した授業作り』

### 提案概要

新学習指導要領の実施に伴う授業時数の増加により、担任のみで授業を行うことが必須となった。そのため、町の外国語推進担当者部会で3・4年生の各15時間、5・6年生の各50時間分の指導案をAETとのTT及び担任一人で行う外国語活動を組み合わせた新形式の指導計画を作成した。また、担任のみでも授業が行えるよう、小学校教員、中学校教員とAETとが連携して、具体的な授業計画案や教材作りを行ってきた。単元ごとに、小中の教員で担当を割り振り、授業の原案を作成し、その後、中学校の教員とAETと5、6年生担任で分けた小学校教員とに分かれ、授業原案の活動について検討をした。研究を進める中で、小学校の外国語活動と中学校英語へのつながりを生かした授業作りをめざすために、小学校の担任と中学校英語教員とのTTという実践も行った。

指導案を作る上で、児童の意識調査のために事前にアンケートを実施した。「①外国語の勉強は好きですか」の項目では、外国語活動に対して前向きで、親しみを持っている児童が多いことがわかる。一方で、外国語の難しさを理由に、外国語活動に消極的な児童もいることを確認した。「わからない」ということが、外国語活動に消極的になってしまう原因であることが、改めてわかった。「②外国語活動で、先生や友達の話を聞くのは好きですか」と「③外国語活動で、先生や友達に話すのは好きですか」を比べると、聞くことより話すことに抵抗を感じているのがわかる。話すことが好きではない理由をみると、「発音があつてか分からぬ」「発音が分からぬ時がある」などの不安によるものである。ここでも、「分からない」ということが、外国語活動に消極的になってしまう原因であることが見て取れる。一方で、アンケートの理由の中には、「(苦手だけど)話せるようになりたい」といった答えがあることから、話したい気持ちがあることも見られる。そこで、本単元では、児童にとって話しやすいと思われる冬休みの思い出を取り上げることで、児童の「話したい・聞きたい」気持ちを引き出そうと単元設定を試みた。単元計画では、児童が楽しみながら学習活動が行えるよう、ゲーム活動を主にして学習を進めることや、中学校の「英語」へのステップを踏まえた内容や設定を考えることとした。

実際の単元では、夏休みについて取り扱っているが、授業を行う時期の関係で本単元では、冬休みについて取り扱い、全4時間の単元計画で授業を行った。この単元は、小学校教員が授業の原案を考え、部会で授業内容を検討した単元である。1時間目は、様々なゲーム活動から、冬にまつわる単語を学習した。2時間目は、担任とAETとの会話を聞き取る中で、「went, enjoyed, ate」など、過去を表す動詞の表現について学習した。3時間目は、担任と中学校教員との授業で、学習した単語や表現を用いたゲーム活動を通して学習した。本時では、まずカードを使って既習の単語や表現を復習し、それらの表現を用いてジェスチャーゲームを行った。ジェスチャーゲームを行った後には、学習した単語や表現を用いて、実際の自分の冬休みについて、書く学習につなげた。4時間目は、担任のみの授業で、冬休みの思い出について、ワークシートに書き、発表した。児童の意識調査のため、本単元の前に、担任・AETが行う授業についてのアンケートを行った。また、中学校教員との授業後に、児童や参観していた教員へアンケート調査を行った。

授業後の児童のアンケートからは、「スクリーンに絵があるのが分かりやすかった。」「ジェスチャーゲームが楽しかった。」「ジェスチャーがあるので分かりやすかった。」「はっきり発音してくれたり、日本語で説明してくれたりしたのが分かりやすかった。」「中学校の勉強が楽しみになった。」といった内容が記載されていた。ICTや視覚資料を効果的に使用できることとともに、ジェスチャーなどの動きを入れることで、英語に苦手意識を持つ児童の理解を促すことができたと感じた。答えがわかると積極的に手をあげて発言しようとしたり、いつもより活発に活動に参加していたりと、英語に親しみを持って授業に取り組むことができ、成果が見られた。一方で、まだ「ジェスチャーは分かるけど、言い方が分からなかった。」と答える児童もあり、課題が残った。児童が、新出の単語や表現を言えるよう、もっと繰り返し話す・聞くことの大切さを感じた。

指導案作りにおいて、小学校と中学校の教員が連携することで、小学校教員が把握している児童の実態を踏まえて、中学校教員の専門的な知識を活かし、さまざまな活動を取り入れることができた。また、中学校教員としては、小学校の指導内容を知ることにより、中学校での指導において小学校からのつながりを意識した授業を進めることができ

るという成果も感じられた。

児童に行ったアンケートの結果から「④外国語を話したり聞いたりできるようになりたいですか」の質問に対して、すべての児童が「はい」と答えている。ここから、外国語による言語活動を通して、コミュニケーションを図ろうとする関心や意欲が高いことがわかる。担任一人で行う授業が増えても、指導案や活動内容の工夫により、児童の外国語への関心や意欲を高めることができると感じた。今後は、新学習指導要領における外国語科の目標「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働きかせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」の育成につなげるためにも、児童の「話したい気持ち」が「話せる」につながるような、指導の工夫の必要性を改めて感じた。今後も、児童が興味・関心をもつことができる外国語の授業づくりに励んでいきたい。

### 質疑応答

- I enjoyed に続くものとして具体的にどんな事柄が入ったかについては、教材として用意したものはカードゲーム、スキー、スノーボード、雪合戦など。なかにはゲームなど、自分で書き方を聞いてきたものもあった。
- ワークシートの作成については、町の研究部会で作成したものである。  
→ a など難しい字体が気になる。ローマ字と英語のちがいにも言及したほうがよい。
- ワークシートに4線を入れない理由はあるか。  
→普段授業のなかでいろんな書き方が見られる。字のバランス、字の間のすき間などを指導するには4線があつた方がよい。
- 研究部会の頻度、体制については、月1回、各学校から1名。指導案ができているのでどう使っていくか検討し、各学校へ持ち帰る。  
続いて、児童が主体的に取り組む活動や場面をどのように設定するか、実際に行っている取組、工夫についてグループ毎に話し合った。
- 身近でよく知っていることを教材にすれば主体的になる。児童の実態に合わせた教材を取り入れていけば主体的になる。例えば留学生への日本案内など。
- 導入が大切になる。Small Talk は大変なのだが使えるとよい。教師が話す姿を見せることも大切である。
- ALTに自分のことを伝える設定があるとよい。児童が一所懸命に行う場面を経験した。ゲーム活動は気をつけて運用しないといけない。日本語を使い始めたり、教師側が結果をもとめてしまったりなど注意が必要である。グループピーリングなど工夫している。
- 授業者の持ち回り形式も工夫としてある。例えば、レッスン1を全クラス分担当する。

### まとめ概要

- 中学生における英検3級程度の英語力の状況は、小中連携の実態と相関がある。
- 本提案は小学校との接続の観点から連携を捉えることも示唆している。小学校の強みを中学校に伝えていくことが大切である。
- 音声から文字の流れを大切にしてほしい。ピクチャーカードなど、視覚的な教材を活用し、日本語を介せず、言語と概念・イメージを結びつける工夫が本提案から紹介された。ぜひ参考にしてほしい。
- 語彙や表現を活用する場面を繰り返し、繰り返し行うことも必要である。
- 中学校の指導案作成の工夫として、小学校での学習との関連という項目を設けるとよい。
- 言語習得は簡単なことではないが、粘り強く言語活用の場面を設定していくのが大切である。

# 概要報告

実施期日	7月29日(月)【午後】
部会名	小学校 総合的な学習の時間部会

## テーマ

## 『主体的で対話的な深い学びを実現するための授業・単元作りの工夫』

### 提案概要

「〇〇っ子まつり」は、各クラスでお店を出店し、他学年の子どもたち、保護者や地域の方々も来校する大規模な行事である。運営委員会から提案される学校行事であるが、総合的な学習の時間の年間指導計画に組み込まれている。運営委員会から提案されているため、児童は興味・関心を示す一方、「行事があるから取り組む」と受動的な実態があった。そこで、「①主体的に行動する。②自分で考えられる。(物事の意味について)③対話を通して、思考力、発言力を鍛える。」の3つの姿を目指し、総合的な学習の時間として「〇〇っ子まつり」を8時間のクラス総合として計画した。この単元の中では、「対話」という手法を取り入れた。「対話」は、一人ひとりが同じ立場で話し合うことが基本で、最後に意見をまとめるのではなく、相手の意見を受け入れて新しい考え方を創り出すのに有効であるため、次の1と4の場面で主に取り入れた。

### 1. 目標・課題の設定

「〇〇っ子まつりは、何のためにやるの?」の問い合わせから始めたところ、子どもたちは、〇〇っ子まつり=「働く」だと考え、「働く」ことに興味を持ち始めた。「働く」ことを意識して、クラスのお店をどんなものにしていくのかを話し合った。

### 2. 情報収集

出店するお店が「お化け屋敷」に決定すると、お化け屋敷について本やインターネットで調べたり、総合プロデューサーの動画を見たりし、お化け屋敷のイメージをふくらませた。

### 3. 探究する

クラスの話し合いから、お化け屋敷のテーマが決定し、「働く」ことを意識して会社のように部署を立ち上げ、役割を決めた。毎時間各係から責任者(担任)へ報告・連絡・相談を行うことを約束として準備を進めた。また、「話合い→課題解決に向けて実行→課題発見→話合い」のようにサイクルを回すようにした。

実行するために様々な条件や制約のある中で、子どもたち同士が課題を持ち解決に導いたり、難しい問題に直面する場面に対して、教師側が自分たちでお化け屋敷を作り上げられるように見守ったり問い合わせたりした。教師側は、アドバイスする程度で見守ることを心がけた。

### 4. 振り返り

まつりが終わった後、最初のテーマである「働く」ことについてもう一度振り返った。振り返りの中で、「人は、何のために働くの?」、「仕事は嫌になってしま続けるものなの?」、「働くお金でお金をもらえたたら幸せになれるの?」、「なんで仕事の内容によって、もらえる金額が違うの?」、「仕事って友情を深めるものなの?」という5つの疑問が出てきた。その5つの疑問を問い合わせ、「対話」を行うことで、子どもたちは話し合いに意欲的になり、自分の考えが揺さぶられたり、新しい考え方方が作られたり、相手のことを理解しようとしたりする姿が見られた。

### 成果と課題(○成果・▲課題)

- クラス総合で単元計画を作っていくことで、「〇〇っ子まつり」が総合的な学習の時間として位置づけられている意味を考えるきっかけとなり、子どもたちは主体的に活動していた。
- 「対話」を通して「働く」ことについて、深く考え、様々な角度から物事について考える児童の姿が見られた。
- 「対話」を通して、子どもたち同士に相手のことを認め合う関係性ができた。
- ▲総合的な学習の時間の他学年との系統性がとれていないので、学校全体で話し合っていく必要がある。
- ▲「対話」という手法はクラスだけで取り組んでいるため、学校全体で研究していくために、共通理解を図る必要がある。
- ▲「〇〇っ子まつり」の扱いを今後どのようにしていくのか、検討していく必要がある。

## 質疑応答

- Q 1 対話をしている子どもたちの動画を見て、物理的にも心理的にも子どもたちの距離感が近く、普段から「対話」の活動を取り入れていることが分かった。どのような場面で「対話」を取り入れているのか。
- A 1 普段は、子どもたちのつぶやきなどから興味のあることをテーマにし、「対話」を取り入れている。理科や社会の延長でテーマを見つけて取り入れるのも良かった。
- Q 2 総合的な学習の時間の最終目標は「探究的な学習」になると思うが、今回の提案では、〇〇っ子まつりの活動を終えて身近な課題に戻り問いかけていた。今回の提案の最終的な目標は、身近な課題に戻ることだったのか。
- A 2 キャリア教育として扱っていたので、様々な職業に広げていきたいと考えていたが、時数の関係で、今回は身近な課題に対しての問い合わせ終わってしまった。
- Q 3 ①〇〇っ子まつりでは、1年生から6年生までの全学年がお店を出すのか。  
②まつりの反響は、どのように知るのか。
- A 3 ①全学年がお店を出している。  
②保護者アンケートをとって反響を知るクラスもあるが、クラスごとに対応が違うので、これから学校全体で保護者アンケートをとるなどの対応を、学校全体で考える必要があると感じている。
- Q 4 グループで対話をした後に、全体で共有する時間を設けていたが、グループ活動の時の子どもたちの見取りは、どのように行っているのか。
- A 4 グループ活動の内容を、教師側がメモをとったり、他の先生に手伝ってもらったりすることもあるが、全体の話し合いの時にグループで出た意見も伝えてもらい、さらに授業の最後の振り返りで見取ることが多かった。
- Q 5 「対話」をじっくりと取り組んでいたが、時間はどう作っているのか？
- A 5 どの教科にも取り入れられるので、総合的な学習の時間に限らず他教科でも取り入れ、月1回は「対話」を取り入れるように心がけている。

## まとめ概要

- 学校行事が総合的な学習の時間の年間指導計画に組み込まれていることによって、「このまま総合で続けていいのか？」でも、子どもたちの楽しみをなくしていいのか？」と疑問に思ってきた。各学校でも行事を精選したり、伝統的な行事だからと残したりし、様々課題があると思う。いきなり行事について変えるのは難しい。来年度からの新学習指導要領が改訂されるので、それをいい機会に学校行事について考えていくといいのではないだろうか。
- 行事をやるかやめるのかを話し合うのではなく、学校教育目標をもとに、どのような子どもの姿を目指すのかを具体的に話し合い、その姿をもとに総合的な学習の時間ではどのような子どもの姿を目指すのかを考えていくことが大切である。具体的な姿が共通理解されていれば、おまつりは総合的な学習の時間に適しているのか考え精選していくことができる。しかし、行事を特活や総合的な学習の時間のどちらかにはっきりと区別するのではなく、総合的な学習の時間として扱うのであれば、目標に向けてどのように行事を取り組むかが大切なので、行事の内容の見直しも必要になってくる。
- 今回の提案では、活動の振り返りがあることや、場の設定がしっかりとしているところが良かった。活動の振り返りについては、どの教科でも基本となるので、大事にしてほしい。「対話」という手法は、総合的な学習の時間だけで取り入れると大変なので、「他教科↔総合的な学習の時間」とサイクルを回していくことが大切である。

# 概要報告

実施期日	7月29日(月)【午後】
部会名	小学校 特別活動部会

## 【テーマ】

### 『望ましい人間関係の育成』～話し合い活動を通して～

## 【提案概要】

〈実践に向けての課題意識〉

研究テーマである「望ましい人間関係の育成」に向けて「話し合い活動」に重点をおいて実践を行ってきた。実践を充実させるために、「話し合いの進め方や合意形成、意思決定の方法を伝えること」と「話し合い活動を通じての人間関係の構築」を大切にして取り組んだ。

〈実践の概要〉

「その活動、クラスのためにいいね！」をキーワードに、子ども達からの提案をもとにして、二週間に一度の話し合い活動を行った。話し合いのたびに、①やり方やルール②どんな工夫ができるか③どんな役割が必要かの三点を柱に、子ども達に改善点を提示し、より良い話し合い活動の形を目指した。また、話し合いを時間内に終わらせることもクラスの課題として挙がっていたが、回数を追うごとに子ども達自身が時間調整に気を配るようになっていった。改善点を繰り返し伝えていくことが重要だと気付いた。

## 【質疑概要】

○「全員が司会進行に携われる」とは、全員が司会をしたという意味か。

・クラスの人数を4人ずつに分けて計画委員を構成。話し合いのたびに、その計画委員が輪番で担当した。全員が司会を経験することはできなかったが、副司会や黒板記録などの、司会団に全員が参加することは達成できた。

## 【研究協議概要】

○全校での話し合い活動の取り組みや積み重ね

・全校を挙げて低学年から積み重ねていくのはなかなか難しいのが現状。担任ごとに、話し合わせ方に違いがあり、学校、学年で話し合いの形の統一が難しい。特別活動の取組への意識や関心の差をなんとかしたい。  
・校内全体で取り組めている学校は少ない。しかし、一年生から取り組んでいるのとそうでないとでは大きな違いがあると考えられる。

○各校の現状や実践報告

・特別活動を校内研等で全校を挙げて重点的に取り組んでいる学校の児童には、やはり良い変化が見られる。そういう成果の報告や実践報告などができる交流の場が市の垣根を越えて設けられると良い。

## 【まとめ概要】

特別活動では、教師側が児童の主体的な活動を促すために、仕掛けや仕組み、型作りを丁寧に行う、単発的な見取りではなく、長期的な見通しを持って、児童の変容をしっかりと見取る、それを次に生かして発達段階に応じさせていくというサイクルが重要である。

新学習指導要領にもある通り、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」という3つの視点が資質・能力という面において重要とされている。この3つの視点は、相互に関わり合っており、明確に区別されるものではないため、各学校・児童の実態に応じて特別活動の指導内容の重点化を、各学校で考えていかなければならない。



# 概要報告

実施期日	7月29日(月)【午後】
部会名	小学校 特別支援教育部会

**テーマ** 『子どもたち一人ひとりが輝き、楽しみながら、達成感を味わえる体育  
～ごっこ遊びの要素を取り入れた活動から、ルールのあるゲームへつなげて～』

## 提案概要

子どもたちが「楽しい」と感じながら体を動かし、目標を達成できるような体育の授業について検討してきた。一つの学習活動で、どの児童にも「できた」と達成感を味わわせることのできる体育の活動内容を模索し続けてきた。個々に応じた目標をどのように設定し、達成していくかということが常に課題となっている。

「ごっこ遊び」など、遊びの要素を意図的に取り入れた体つくり運動の授業を計画し、そこから発展させて、基本的な動きを身につけさせ、更に「ルールのあるゲーム」へつなげていった。

2017年度2018年度の体育の指導計画と、以下の5つの単元について報告した。

- ・海賊鬼ごっこ(指示理解・鬼ごっこ)：海賊になりきって、指示を聞いて動く。
- ・桃太郎マット(マット表現運動)：物語に沿って、多様な体の動きを取り入れたマット運動。
- ・なりきり跳び箱(跳び箱運動)：跳び箱を使い、いろいろなものになりきって遊ぶ。
- ・ラケットベースボール：投げる・捕る・打つ・走る。
- ・フロアバレーボール：転がす・パス・アタック。

## <成果と課題>

- ・段階的に学習内容を発展させることで、一年生も楽しみながら活動することができた。
- ・スポーツの楽しさを感じられるような種目の要素を取り入れた。運動要素を細分し、更に楽しみながら活動できる学習を心がけたことにより、基本的な運動が身に付き、運動に意欲的に取り組める児童が増えた。
- ・交流級の体育の内容に近いものを計画したことで、交流級で生かされ、児童が自信をもって取り組むことができた。
- ・継続して体育の授業を行うことにより、きまりを守る・安全に気を付ける・準備や片づけを行うなど、日常生活でも必要となる力を持つことができた。
- ・児童は運動することが楽しくなってきてはいるが、より楽しむための工夫や友達との関わりがまだ少ない。

## 質疑応答

提案についての質疑応答の他に、各校の教育課程や指導の工夫、交流級との関わり方についての質疑が出た。

- 集団活動に苦手さを持つ児童への手立てや、より充実した学習にするための工夫について。  
→集団活動ができる児童が多い。集団活動に苦手さを持つ児童には、クールダウンをしながら授業に参加できるようにするなど、個別に対応する手立てをとっている。また、授業をより充実させるために、児童の様子を見取り、教員が常に話し合いながら授業を計画し、練り直してきた。
- 年間計画の「1年生との交流会」ではどのようなことを行っているのか。  
→支援級の児童の様子や支援級の活動について知ってもらうことを目的とし、1年生と3回交流会を

している。(1) 10月…ハロウィン(キャンディ作り)(2) 12月…クリスマス(スクーターボードで運動、オーナメント作り)(3) 2月…節分(鬼の顔を描いて体育館につるす)  
2年生からは、児童同志の日常の交流も盛んになるので交流会はしていない。

○個別の指導計画に沿って指導するにあたり、支援級の体育の小集団学習に参加しない児童はいるか。  
→通常学級への転籍を視野にいれ、交流級での学習をメインにしている児童がいる。体育の参加については、その保護者だけでなく児童本人とも活動内容や付けるべき力について話し合い、参加体制を決めていった。

○交流級での児童同士の関わりや声掛け、様子について。

→交流に行くと交流級の児童が「おかえり」と声をかけてくれる。また、支援級の児童が支援級に戻る時には、「いってらっしゃい」と送り出してくれる。学校全体で日常生活の関わりを大切にしており、声をかけ合うことを大切にし、支援級の児童も交流級の一員として過ごすことができている。また、交流級の学習内容等について、交流級の担任と情報を共有し、交流の際には前もって児童に学習内容などを説明して見通しを持たせている。それにより安心して交流級での学習に取り組むことができ、より良いかかわりにつながっているようだ。

更に児童同士の関わりを豊かにするため、交流級の児童に「どんな手助けが必要か」を伝えている。例えばベースボール型の授業では、どちらに走れば良いか声をかける係や伴走係をしてもらい、一緒に活動に取り組むことができている。

## まとめ概要

児童一人ひとりが達成感を持って活動するためには、児童の教育的ニーズを把握し、個別の配慮をしながら話合いを中心にして授業の計画を立てることが必要である。スキルの習得のみを目的とはせず、「苦手が楽しい」になるよう、スマールステップで活動を発展させ、児童同士の関わりを豊かにする視点も取り入れている。更に豊かなスポーツライフを目指し、児童同士の関わりを発展させるためには、名前を呼んでからボールを渡すなどの手立てや声掛けをするのも良いのではないだろうか。

グループ協議での協議からは、各地区の課題や日常の指導での課題についても挙げられた。

- ・実践報告は、遊びの要素を大切にすることで興味を持って取り組めていた。
- ・運動能力や段階別の集団での学習など、多様な指導形態が考えられる。
- ・日頃から交流級の担任と連携をし、子ども達同志がかかわりを持てるように準備を進めていた。参考にしたい。教員同士の情報共有やコミュニケーションが大切である。
- ・交流学習では児童全員に付き添い指導ができるわけではないので、付き添い指導が必要な児童の交流の設定が難しい。
- ・学校によって交流の方法がかなり違う。小集団で音楽や体育をやりたいと思っても、交流により人数が減って、小集団を確保できないこともある。
- ・般化については将来を見据えることが大切。スマールステップで取り組ませる。
- ・支援級の児童が交流級で学習をしている時は、交流級のルールを守ることが基本であるが、配慮は必要。その都度確認することが必要。

新学習指導要領の「一人一人に応じた指導の充実」「生きて働く知識」の実現にむけて、今回の提案が良い学びとなった。インクルーシブ教育についての共通理解など、学校全体で考えていくことが必要である。